

わが夫の今の妻を取らんと誓ひて水をたたき水神に祈りければ、百夜に満ずる時、すなわち鬼となりて今の女を取る。よって、鬼を公人、ここに祝ふと云へり。

又曰く、橋守の御神とも云へり。伊勢物語には、「さむしろに衣かたしき今夜もや恋しき人にあはでのみ寝ん」とあり、昔、宇治川のほとりに夫妻棲みけるが、男新宮へ財もとめんとて行き返らざりけるを、女恋ひ恋ひて、かの橋の辺において死にて神となる。よって、今橋守の御神と云ふ。種々の義あるか。さむしろとはせばき筵なり。

本文 国文学研究資料館所蔵、初雁文庫本ナ355 (マイクロフィルムナ616)より翻刻して引用

の後、余りのねたましさに百晩の間、宇治川の川辺に行く。髪を水に浸して、願わくば、鬼神となって、私の夫の今の妻を取り殺そう、と誓って、水を叩き、水神に祈ったところ、百晩の満願の時、鬼となって今の女を取り殺した。したがって、鬼を、人々はここに祀ったのだという。

また、橋守の御神とも言うという。『伊勢物語』には「さむしろに……(葦で編んだ狭い筵に自分の衣だけを広げ、今宵も私は恋しい人に逢わないで独り寝をするのだろうか)」とあり、昔、宇治川のほとりに夫妻が住んでいたのだが、その夫が新宮へ財を得ようと思ったまま帰ってこなかったのを、妻はひたすら恋しく思い、あの宇治橋のあたりで死んで神となった。よって、今、橋守の御神と言う。さまざまの意味があるのだろうか。「さむしろ」とは狭い筵のことである。

## 解説

### 1 「宇治の橋姫」受容の展開

セクシオン2-18では『新古今和歌集』の「宇治の橋姫」を詠む和歌を読み、それらが『古今和歌集』恋四に入集するよみ人知らず詠を本歌としていること、その古今歌は『源氏物語』宇治十帖の女君たちの造型にも影響を与え、「宇治の橋姫」に「待つ女」「悲恋」といったイメージを付与したこと、『新古今集』の本歌取り詠は、『源氏物語』を通してもたらされたイメージを投影させていることを学びました。いっぽうで、「宇治の橋姫」には歌字書などに載る「橋姫の物語」伝承もあり、そこでは、ふたりの妻と龍王にさらわれ帰らぬ夫との間で、愛と嫉妬の物語が繰り広げられていることにもふれました。

その「宇治の橋姫」のイメージは、後世どのように変容したのでしょうか。

### 2 待つ女から遊女へ

まず①では、中世に成立した演劇である能の作品、謡曲(能の台本)『江口』のなかに「宇治の橋姫」がどのように受容されているか見てみましょう。能は、平安時代におこなわれていた猿楽が鎌倉時代に歌舞劇として発展(猿楽の能)、南北朝期にいくつもの猿楽の座(劇団)が活躍するなか、先行の諸芸能の長所を取り込んで大胆な改革をおこ

ない実践した観阿弥・世阿弥父子によって、現在見るかたちとなった芸能です。また、彼ら父子の時代に室町幕府の庇護を受けて、大きく発展しました。

さて、参考資料に挙げた『新古今集』や『撰集抄』に見える西行と遊女のやりとり(↓参考資料1・2)を題材にした世阿弥作の謡曲『江口』では、江口の里を訪れた僧の前にあらわれた遊女江口の君の霊が、遊女の身のつらさやはかなさを嘆き、自分のもとに來ない人待ち続ける「松浦佐用姫」や「宇治の橋姫」も自分たち遊女と同じ境遇・身の上だ、と述べています。能の台本である謡曲の詞章は、古典の文章や和歌、内容、イメージを巧みに取り入れて作られています。ここでも客を待つ遊女に、ひたすら自分の思う人の訪れを待つ「松浦佐用姫」や「宇治の橋姫」といった古典の「待つ女」「悲恋」のイメージを重ねることで、來ないかも知れない客を「待つ」ことを生業とする遊女の悲しき、むなしき、けなげさを際立たせているのでしよう。と同時に、この『江口』の詞章で遊女と同列に書かれたことによつて、宇治の橋姫とは宇治の遊女のことであるとも考えられています。

### 3 嫉妬する女から鬼女へ

②は、『平家物語』諸本(↓セクシオン1-4解説)のうち、屋代本『平家物語』、百二十句本『平家物語』などに書かれている「剣巻」からの一部分です。「剣巻」は、天皇家の宝剣と源家に伝わる名剣の